

# 中学生の評価懸念と友人とのつきあい方との関連

宮前 淳子  
(学校教育)

760-8522 高松市幸町 1-1 香川大学教育学部

## The Relationship between Fear of Negative Evaluation and Friendship in Junior High School Students

Miyamae Junko

*Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522*

**要 旨** 本研究は、中学生の評価懸念と友人とのつきあい方との関連について検討したものである。結果から、評価懸念が高い生徒は相談相手として「同じクラスの友だち」を選択する割合が低く、他生徒よりも友人を傷つけないように気を遣っていることが明らかとなった。しかし、場の雰囲気を楽しくするようなつきあい方や、相手の領分に踏み込まず深い関係を回避するようなつきあい方については、評価懸念の高さによる違いは認められなかった。

**キーワード** 評価懸念 友人関係 中学生

### 問題と目的

評価懸念とは、「他者からの否定的な評価に対する心配や、否定的に評価されるのではないかと予測に対する心配」と定義される概念である (Watson & Friend, 1969)。

この「否定的に評価されているのではないか」という不安は、自分が他人と比べて劣っているというネガティブな自己像を反映したものであるという (Butler, 1993)。しかし中学生を対象とした研究では、ネガティブな自己像を持つ生徒より、友人の視点から推測した自己像と現実の自己像とのずれが大きい生徒のほうが、評価懸念が高いことが明らかにされている (山本・田上, 2001)。中学生では、友人から過大評価されていると認知している生徒だけでなく、自

己をネガティブに評価していない生徒であっても、友人から過小評価されていると認知している生徒においては評価懸念が高い傾向がみられた (山本・田上, 2001)。このことから、中学生では友人とのつきあい方が不安の高さと密接に関連していることが予測される。また、評価懸念が高い生徒は、友人に自分の気持ちや考えを十分に表現することができないまま、友人との関係を維持しているのではないかとと思われる。

青年期における友人とのつきあい方に関しては、従来から様々な研究が行われ、関係の希薄化が指摘されてきた (安井・谷, 2008)。岡田 (1995) は、現代青年にみられる特徴的な友人関係について分析し、互いに傷つけあわないように気を遣う、互いの領分やプライバシーに踏

み込まず関係の深まりを回避する、群れ行動を指向し楽しさを追求する、といった3つの側面を見出している。また、佐藤・山本・加藤(1991)の高校生を対象とした研究においては、自分が悩みを抱えているとき、友人からいつでも優しく援助してもらいたいと期待しているが、友人に対しては必要以上に介入せず、「むこうから援助を求められれば相談にのる」といった、距離を置いたつきあい方をする傾向にあることが明らかにされている。さらに、岡田(1999)は大学生が理想とする友人関係について検討し、青年は悩みを打ち明けるなどの内面的関係だけでなく、ウケるような行動をとって楽しい雰囲気を持続するような表面的な浅い関係も肯定的にとらえていると述べている。

一方、生活の大半を学校で過ごす中学生にとって、学級集団のなかでの友人関係は非常に重要なものである(藤田・伊藤・坂口, 1996)。中学生になると、部活動や係活動など活動の場が広がるのに伴って友人関係も縦横に拡大していく。中学生が学校のことで困ったり悩んだりした時、相談したいと感じるのは友人ではないかと思われる。では、評価懸念が高い生徒の場合は、友人に対してどのような行動をとるのだろうか。

高不安者の対人行動に関する先行研究においては、不安が高い人ほど、他者と一緒にいることや話し合うことを避けるといった行動をとる傾向にあることが示されている(Leary, 1983a)。また本間(1990)も、青年期の対人不安傾向は社会的場面における消極性と関連していると述べている。しかし中学生の場合、学校で友人との関わりを避けたいと考えたとしても、実際に回避することは物理的に難しいのではないだろうか。また、高い社交性と高い評価懸念とは必ずしも排他的な関係ではないことが示されており(Yamamoto, 2007)、友人から否定的に評価される事態を避けるために、教室で過剰に社会的に行動してしまうこともあるのではないかと推測される。

以上のことから本研究では、中学生を対象に、以下の二点について検討することを目的と

する。第一に、評価懸念の高さによって、学校に関することで相談したいと考える相手が異なるかどうかについて検討することを目的とする。第二に、中学生の友人とのつきあい方の特徴について明らかにするとともに、評価懸念の高さによって友人とのつきあい方が異なるかどうかについて検討することを目的とする。

## 方法

### 調査協力者

公立中学校に在籍する1年～3年生の生徒311名(男子160名、女子151名)を対象とした。詳細な人数構成はTable 1に示す通りである。

Table 1 調査協力者の人数構成

	男子	女子	合計
中1	68	63	131
中2	60	58	118
中3	32	30	62
合計	160	151	311

### 調査内容

以下の尺度から構成される質問紙票を用いて調査を実施した。

(1) 評価懸念尺度(山本・田上, 2007): 小・中学生を対象に作成された尺度で、「わたしは、ほかの人が自分をどう思っているか気にしすぎていることがあります」などの項目から構成される。10項目について、それぞれ5件法で回答を求めた。

(2) 相談したい相手: 「学校のことで心配なことや困ったことがあるとき、誰に相談したいと思いますか」との質問に対して、①父親、②母親、③兄弟・姉妹、④同じクラスの友だち、⑤同じクラスではない友だち、⑥先生、⑦誰にも相談しないで自分で考える、の7つの選択肢から1つ選択するよう求めた。

(3) 友人関係尺度(岡田, 2002): 岡田(1995)が作成した現代青年に特徴的な友人関係に関する尺度を改訂したものである。大学生を対象として作成されており、「気遣い」、「群れ」、「不

介入」の3因子から構成される。11項目に対し、それぞれ5件法で回答を求めた。

### 手続き

調査はクラス担任による一斉配布方式で実施され、その場で回収された。また、調査は無記名で実施した。

なお、調査票の表紙には、研究が終了した後、調査票を必ずシュレッダーにかけて処分することを明記した。

### 結果

#### 評価懸念の高さと「相談したい相手」との関連

評価懸念の高さによって選択される相談相手に違いが見られるかを検討するため、以下の手続きで調査協力者を3群に分類した。

まず、評価懸念尺度10項目の合計得点を算出した。9名の回答に不備があったため、以降の分析には302名のデータを用いることとした。

次に、性および学年を独立変数、評価懸念を従属変数とした2要因分散分析を行った。その結果、性の主効果が見られ（ $F = 18.29$ ,  $p < .001$ ）、女子の平均値が男子よりも有意に高かった。学年による有意な差はみられなかった。以上の結果をふまえ、性による影響を除くために男女ごとに評価懸念の平均値 $\pm 0.5SD$ を基準として対象者を分類することとした。最終的に、評価懸念低群（89名）・中群（131名）・高群（82名）の3群に分類された。

次に、評価懸念の低・中・高群別に、相談したい相手として選択された割合を算出した（Table 2, Figure 1～3）。

評価懸念高群では、相談相手として「同じク

Table 2 「学校のことで心配なことや困ったことがあるとき、だれに相談したいと思いますか」に対する評価懸念低・中・高群別にみた回答の割合

選択項目	評 価 懸 念					
	低群		中群		高群	
	N	%	N	%	N	%
父 親	0	0.00	2	1.53	0	0.00
母 親	13	15.85	26	19.85	16	17.98
兄 弟・姉 妹	5	6.10	4	3.05	3	3.37
同じクラスの友だち	31	37.80	53	40.46	22	24.72
同じクラスではない友だち	13	15.85	22	16.79	23	25.84
先 生	0	0.00	2	1.53	5	5.62
だれにも相談しないで、自分で考える	20	24.39	22	16.79	20	22.47
合 計	82	100.00	131	100.00	89	100.00

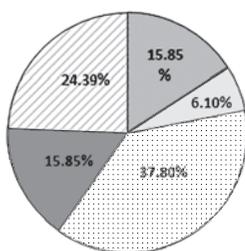


Figure 1 評価懸念低群における相談相手の選択割合

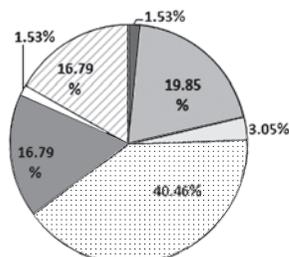


Figure 2 評価懸念中群における相談相手の選択割合

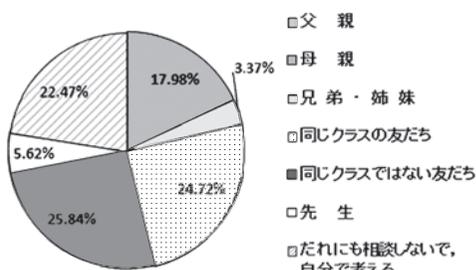


Figure 3 評価懸念高群における相談相手の選択割合

ラスの友だち」よりも「同じクラスではない友だち」を選択する割合が、他の群と比べて高いことが明らかとなった。逆に、評価懸念低群や中群では、「同じクラスの友だち」が約4割となり、すべての選択肢のなかで最も高い割合を占めていることが分かった。

また、「だれにも相談しないで、ひとりで考える」が選択された割合は、評価懸念低群において最も高く、評価懸念中群で最も低いことが示された。一方、「母親」が選択された割合は、3群間で大きな差はみられなかったものの、評価懸念低群において最も低く、評価懸念中群で最も高いという逆の結果となった。

「父親」や「兄弟・姉妹」、「先生」が選択される割合はどの群においても低く、評価懸念の高低にかかわらず共通の傾向であることが明らかとなった。

#### 友人関係尺度に関する分析結果

##### (1) 友人関係尺度の因子分析結果

本研究では中学生を対象としたが、岡田

(2002)によって作成された友人関係尺度は大学生を対象として作成されている。そこで、因子構造を確認するために岡田(2002)と同様の方法で因子分析を行った。

友人関係尺度に含まれる11項目を用いて因子分析(主因子法・Promax回転)を行った。その結果、3つの因子が抽出された(Table 3)。第1因子は“相手の考えていることに気がつかう”など、互いに距離をとって深いかかわりを避けるつきあい方を示す4項目から構成され、岡田(2002)と同様に“気遣い”因子と命名された。第2因子は、“冗談を言って相手を笑わせる”などの3項目から構成され、岡田(2002)と同様に“群れ”因子と命名された。第3因子は、“お互いのプライバシーには入らない”などの4項目から構成され、岡田(2002)と同様に“不介入”因子と命名された。以上の結果から、本研究でも岡田(2002)と同様の因子構造が確認された。

次に、各下位尺度についてCronbachの $\alpha$ 係数を算出した。その結果、「気遣い」因子では

Table 3 友人関係尺度の因子分析結果

質問項目	I	II	III	共通性
I 気遣い ( $\alpha=.762$ )				
相手の考えていることに気がつかう	.861	-.041	-.012	.706
互いに傷つけないよう気がつかう	.848	-.110	.002	.654
楽しい雰囲気になるよう気がつかう	.560	.344	-.042	.575
友だちグループのメンバーからどう見られているか気になる	.413	-.052	.022	.163
II 群れ ( $\alpha=.700$ )				
冗談を言って相手を笑わせる	-.079	.908	-.001	.771
ウケるようなことをよくする	-.033	.792	.025	.610
みんなと一緒にいることが多い	.257	.349	.011	.267
III 不介入 ( $\alpha=.597$ )				
お互いのプライバシーには入らない	-.056	.014	.810	.624
お互いの領分にふみこまないようにしている	.011	-.040	.488	.239
相手に甘えすぎないようにしている	.328	-.031	.338	.301
相手の言うことに口をはさまない	.056	.101	.331	.151
因子間相関	II	.455		
	III	.340	.180	

$\alpha = .762$ , 「群れ」因子では  $\alpha = .700$ , 「不介入」因子では  $\alpha = .597$  であり, ある程度の内的一貫性が確認された。

(2) 下位尺度間の性差に関する分散分析結果  
分析に先立ち, 友人関係尺度の各下位尺度の合計点数を項目数で割り, 下位尺度得点として算出した。次に, 各下位尺度における平均値に男女間で差がみられるかどうかについて検討するため, t 検定を行った (Table 4)。その結果, 「気遣い」では男女間で有意な差がみられ, 男子の平均値が女子よりも有意に低かった ( $t = 4.31$ ,  $p < .001$ )。「群れ」においても有意な差がみられ, 男子の平均値が女子よりも有意に低かった ( $t = 2.21$ ,  $p < .05$ )。「不介入」では, 有意な差が認められなかった ( $t = 1.37$ , n.s.)。

Table 4 友人関係尺各下位尺度の男女別平均値と t 検定結果

下位尺度	男子		女子		t 値	
	平均値	SD	平均値	SD		
気遣い	3.17	0.93	3.59	0.77	4.31***	男子<女子
群れ	3.07	1.01	3.30	0.83	2.21*	男子<女子
不介入	2.99	0.75	3.10	0.60	1.37	n.s.

\* $p < .05$     \*\* $p < .01$     \*\*\* $p < .001$

### (3) 下位尺度間の相関関係

男女別に各下位尺度間の相関係数を算出した (Table 5)。その結果, 男子では「気遣い」と「群れ」との間に, やや高い正の相関がみられた ( $r = .543$ )。また「気遣い」と「不介入」( $r = .376$ ), 「群れ」と「不介入」( $r = .289$ )との間に中程度の相関がみられた。一方, 女子では「気遣い」と「群れ」( $r = .309$ ), 「気遣い」と「不介入」( $r = .274$ )との間に中程度の相関がみられた。し

かし, 「群れ」と「不介入」との間にはほとんど相関がみられなかった ( $r = .018$ )。

Table 5 男女別下位尺度間相関

		II 群れ	III 不介入
男子	I 気遣い	.543	.376
	II 群れ		.289
女子	I 気遣い	.309	.274
	II 群れ		.018

### 評価懸念の高さと友人とのつきあい方との関連

評価懸念の高さによって, 友人とのつきあい方が異なるか否かについて検討するため, 評価懸念の高さを独立変数とした1要因分散分析を行った。なお, 性による影響を除くため, 男女ごとに対象者を3群に分類している。

分散分析の結果, 「気遣い」で有意な差がみられ, Tukey法を用いた多重比較を行ったところ, 評価懸念低群の平均値が中群, 高群よりも有意に低く, 中群の平均値が高群よりも有意に低いことが明らかとなった ( $F = 26.58$ ,  $p < .001$ )。「群れ」と「不介入」では, 群間に有意な差はみられなかった。以上の結果はTable 6に示すとおりである。

### 考 察

#### 評価懸念の高さと「相談したい相手」との関連

評価懸念が高い生徒は, 相談したい相手として「同じクラスの友だち」を選択する割合が他の生徒に比べて低いことが明らかとなった。また, 「同じクラスではない友だち」を選択する割合が他と比較して高いことが分かった。これらの結果から, 評価懸念が高い生徒は, 学校の

Table 6 評価懸念低群・中群・高群における友人関係各下位尺度の平均値と分散分析結果

下位尺度	評価懸念低群		評価懸念中群		評価懸念高群		F値	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD		
気遣い	2.95	0.93	3.36	0.70	3.85	0.84	26.58***	低<中<高
群れ	3.11	0.96	3.19	0.84	3.29	1.00	0.78	n.s.
不介入	3.01	0.77	3.02	0.50	3.13	0.79	0.93	n.s.

\* $p < .05$     \*\* $p < .01$     \*\*\* $p < .001$

ことで心配なことや困ったことがあっても、身近な級友に打ち明けることは他の生徒に比べて少ないと考えられる。

一方、「母親」や「同じクラスの友だち」が選択された割合が最も高かったのは評価懸念中群であった。なぜ、低群ではなく中群でこのような結果がみられたのであろうか。中学生になると、多くの子どもは小学校の時よりも他者による客観的評価を気にするようになる（山本・田上，2007）。評価懸念中群は、他者からのネガティブな評価が“やや気になる”という生徒から構成される群である。以前よりも他者からの評価を気にするようになったからこそ、「こんな自分は嫌われてしまうのではないか」と悩み、誰かに相談したくなるのであろう。そんなときに相談相手として選択されるのが同じクラスの友人や母親といった心理的に身近な存在であり、悩みをひとりで抱えずに相談することによって、不安を緩和させているのではないかとと思われる。

「だれにも相談しないで、ひとりで考える」については、評価懸念が高い生徒で選択した者は2割程度であり、評価懸念が低い生徒よりもやや割合が低いことが明らかとなった。このことから、評価懸念が高い生徒であっても、誰にも相談したくないと考える者が多いわけではないと言える。他の生徒と同様に、誰かに悩みを聞いてもらい、本音を打ち明けたいと考えているのであろう。だが、友人からの否定的な評価を過剰に心配してしまう評価懸念高群では、相談したくても同じクラスの友人には相談しにくく、そのために、「どう思われているのか」という不安がさらに高まってしまっているのではないかと考えられる。こうした悪循環を断ち切るためにも、相談して大丈夫だと思えるようなきっかけ作りや、信頼関係構築のための支援が必要であると思われる。

なお本研究では、生徒が選択したそれぞれの相手に対して、実際に相談ができていないかについては回答を求めている。また、悩みの種類によっては、相談する相手が異なることも考えられる。今後は、評価懸念が高い生徒が、相談

したい相手に実際に相談することができているかどうか、また相談の内容によって相談する相手を選択しているかどうかについても検討する必要があるだろう。

#### 評価懸念の高さと友人とのつきあい方との関連

中学生の友人とのつきあい方に関する分析を行った結果、大学生（岡田，2002）と同様の因子構造を有していることが明らかとなった。また中学生では、女子の「気遣い」および「群れ」の得点が、男子と比較して有意に高かった。このことから、中学生では男子よりも女子のほうが、友人とかかわる際に相手を傷つけないように言葉を選んだり、相手を笑わせたりして、できるだけ楽しい雰囲気を持続するように行動していると考えられる。岡田（2002）の研究では性差が認められていないため、本研究の傾向が年齢の上昇にしたがってどのように変化するかについては、さらに小学生や高校生を対象を含めて検討する必要があるだろう。

また、下位尺度間の相関関係に関して、岡田（2002）の研究においては「気遣い」と「不介入」の間にのみ中程度の正の相関が認められたが、本研究では、それに加えて男女とも「気遣い」と「群れ」との間にやや高い正の相関が認められた。「群れ」は、「冗談を言って相手を笑わせる」、「ウケるようなことをよくする」などの項目から構成される尺度である。本研究の結果から、中学生においては、男女とも、友人に対して気遣いをしている生徒ほど、意識して明るくにぎやかに振る舞っているのではないかとと思われる。

また、男子では「群れ」と「不介入」の間にも中程度の相関がみられた。これは、明るくにぎやかに振る舞う男子ほど、関係を深めようとせずお互いのプライバシーを尊重しようとする態度をとる傾向を示すものであり、女子にはみられない特徴であった。中学生の女子は、クラスで明るい雰囲気を維持しながら友人とつきあうために、家族のことや自分のプロフィールなど、プライベートな事柄の共有が必要になることも少なくないのではないだろうか。そのため

に、「群れ」と「不介入」との相関関係に男女間で差がみられたのではないと思われる。

次に、評価懸念の高さによって友人とのつきあい方が異なるかどうかについて検討した結果、「気遣い」でのみ有意な差がみられた。評価懸念が高い生徒は、他の生徒と比較して、友人を傷つけないように気を遣っていると言える。しかし、「群れ」や「不介入」においては、評価懸念の高低による有意な群間差は認められなかった。このことから、評価懸念の高い生徒であっても、他の生徒と同程度に冗談を言って友人を笑わせ、時にはプライベートな事柄も共有しながら、友人関係を円滑にこなそうと行動しているのではないかと考えられる。

またこの結果は、評価懸念という内面的特性が、中学生では回避行動などの消極的な外顕的行動に反映されにくいことを示すものでもある。上記の結果から考えると、評価懸念が高い生徒であっても、一見すると、教室では適応的に行動しているように見えるのではないだろうか。そのために、教師が子どもの評価懸念の高さを客観的に把握することが困難になり(山本, 2007)、適切な介入が遅れてしまうのではないかとと思われる。

たとえば、普段は明るく適応的に行動していた生徒が「いきなり不登校になった」とされ、周囲は原因が分からず対応に戸惑ってしまうことがある。しかし本人は、高い不安を抱えながら相当の努力で友人関係を維持しており、しかもそれを誰にも相談できずに悩み続けていた、という事例は少なくない。行動にあらわれない不安の高さに周囲が気づくためにも、心の健康調査等を実施して早期に適切な介入を行う必要があると思われる。

#### 引用文献

Butler, G. 勝田吉彰 (訳) (1993). 不安, ときどき認知療法…のち心は晴れ 星和書店  
藤田英典・伊藤茂樹・坂口里佳 (1996). 小・中学生の友人関係とアイデンティティに関する研究 東京大学大学院教育学研究科紀要, 36, 105-127.

本間恵美子 (1990). 対人不安心性に関する予備的考察 函館大学論究, 22, 1-18.  
Leary, M. R. (1983a). A brief version of the fear of negative evaluation scale *Personality and Social Psychology bulletin*, 9, 371-375.  
Leary, M. R. (1983b). Social anxiousness: The construct and its measurement. *Journal of Personality Assessment*, 47, 66-75.  
岡田努 (1995). 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 354-363.  
岡田努 (1999). 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について 教育心理学研究, 47, 432-439.  
岡田努 (2002). 現代大学生の「ふれ合い恐怖の心性」と友人関係の関連についての考察 性格心理学研究, 10, 69-84.  
佐藤有耕・山本誠一・加藤隆勝 (1991). 高校生の悩みと求める援助の特質 筑波大学心理学研究, 13, 141-154.  
Watson, D., & Friend, R. (1969). Measurement of social-evaluative anxiety. *Journal of consulting and clinical psychology*, 33, 448-457.  
山本淳子・田上不二夫 (2001). 中学生の評価懸念とネガティブな自己概念との関連 日本カウンセリング学会第34回大会発表論文集, 470-471.  
山本淳子 (2007). 教師の視点からみた思春期の子どもの評価懸念に関する研究 香川大学教育実践総合研究, 14, 93-100.  
山本淳子・田上不二夫 (2007). 思春期における評価懸念と承認欲求との関連 カウンセリング研究, 40, 116-126.  
Yamamoto, J. (2007). The Influence of Fear of Negative Evaluation on Enjoyment of Attending School among Socially Well-adapted Children. 29<sup>th</sup> Annual International School Psychology Colloquium, 105.  
安井圭一・谷冬彦 (2008). 現代青年の友人関係と自我同一性との関連 日本パーソナリティ心理学大会発表論文集, 17, 212-213.

## 謝辞

本研究の実施にあたり，調査にご協力くださった中学校の先生方並びに生徒の皆様に，この場をお借りして感謝申し上げます。